れぞれの性質があります。男土は粒子が粗く、収縮率は小さく、高い焼成温度で焼けますが燻しが付着しづらい粘土ですが、それに対して女土は粒子が細かく、収縮率は大きく、捻じれやすく高温には堪えません。瓦は高温で焼くほど固く、寒さに強い瓦になりますが、当時の窯は今と違って「だるま窯」と呼ばれる薪で焼く土窯なので火の近くにあって、よく焼けた瓦は収縮率も大きく、窯の中で大きく変形します。当時、京都府文化財保護課に在籍されていた後藤佐雅夫氏（現在、全文連常任理事）からも弊社の瓦を「よく焼けていて文化財に適した瓦だ」という評価を頂きました。

昭和30年後半に真空土錬機とガス窯が発明され、これが多くの瓦製造工場に普及してからは、焼成温度が1000℃以上で吸水率が５パーセント前後という瓦の量産が可能になっていきます。しかし、焼き上がった瓦は気泡がなくなり密度の高いものとなりますので、比重が大きくなり多少重くなるため厚さを薄くするなどの工夫がされるようになります。その後、瓦の需要も増え、たかだか70年余りの間に瓦業界は、コンピューターやロボットが導入され、少ない人件費で大量生産が可能になるまでに発展してきました。造られる瓦はJISマークが押され、均一な製品が比較的安価で入荷出来るようになってきます。需要の多い平板瓦や一般の桟瓦葺き用の瓦は全てオートメーションのラインに乗るよう設備投資されてきました。しかし反面、文化財や社寺に使われるような特殊な瓦は大きさ、形状、瓦当紋等全て見本による手造りとなり、量産が出来ません。瓦屋根市場の二分化される理由がそこにあると思います。

歴史的伝統建造物の保存修理は一度間違った修理をすれば後世に間違ったものが残り、当初のものは伝わらなくなります。選別作業を行い再用出来る瓦は出来るだけ再用し、葺き方にもあらかじめ実測調査した記録に基づき、棟積みや箕甲の納まりなど、出来るだけ現状を変えることなく解体前に復元することが大事です。その為には、大工工事との相談、連携も必要ですし、原寸図も描けなければなりません。職人としての長年の経験と知識が必要となります。他業種との打ち合わせが出来るよう、性格的にも協調性のある、高い人間性も必要となってきます。

重文 仁和寺観音堂保存修理（瓦葺替）を当社が施工

重文 仁和寺観音堂（保存修理竣工後）

これからも、若い職人の育成と伝統技術を継承していく為に、会長を務める日本伝統瓦技術保存会としても努力していかなければなりませんが、何といっても実践的経験が出来る場所をご提供頂けることが今、最も必要とされています。今後ともよろしくお願い致します。

【お詫びと訂正】

本年１月発行の第119号９ページに掲載した「小山寺の由来と文化財」の執筆者名に誤りがありました。関係各位にお詫びし、下記のとおり訂正いたします。

（誤）小山寺　住職　川上　高昌

（正）小山寺　住職　丹治　純孝